



写真5 ハーバード本『源氏物語』第12巻「須磨」の巻頭部分（上：ハーバード大学蔵）と中山本『源氏物語』第38巻「鈴虫」の巻頭部分（下：国立歴史民俗学博物館蔵）。ともに鎌倉時代初期に作成されたものである。

するのが、2008年より新たに提唱している本文分別試案です。〈甲類〉は、私案だった〈河内本群〉の延長にあります。

つまり、池田亀鑑による『源氏物語』の本文の3分類〈青表紙本・河内本・別本〉を、今後私は〈甲類〉と〈乙類〉という概念で括りたいと思います。この本文分別試案を、現状における『源氏物語』の本文のありように当てはめて、今しばらくは対処していきたいと思っています。

〈甲類〉と〈乙類〉という写本グループを示す名称は、これまでの池田亀鑑による分類を一度リセットするための、あくまでも暫定的なものです。今後の分別の進展によって、さらに的確な命名がで

いう基礎研究の大切さを、改めて問いかけるものとなりました。

しかし、そもそも〈別本〉とは何でしょうか。それが曖昧なままに、新聞記事がどんどん書かれています。池田が言った〈別本〉であれば、それは『源氏物語』の古写本の形態的特徴から分類されたときの「その他」の写本です。それを報道では、『源氏物語』の内容にまで敷衍して、平安時代の写本の解明に資するものという、拡大解釈によって認定した〈別本〉が見つかった、としています。伝えられてきた「物の形」で分類した物差しによって、その「物の内容」をも計る尺度にしようとしているのです。そもそも、計測する用途が違う物差しが、物語の本文を評価するときに使われています。こんなことがまかり通っていること自体が、『源氏物語』の本文研究がいかに遅れているかを教えてくれます。

『源氏物語』の古写本や、ましてやその内容である本文が新聞等に報道されたのは、昨年が『源氏物語』の千年紀であったことに起因します。しかし、そればかりではないのです。これまで、我々が読むテキストが、「大島本一辺倒」であったことへの揺戻しが作用していると思われる。ここには、これまでに絶対視されていた写本「大島本」への信頼が揺らぎ出したことが伏流となっています。

『源氏物語』が「大島本」だけで受容されている研究状況に異議を唱え、『源氏物語別本集成 正・続』で具体的に検討する資料を提供しだして、やっと20年が過ぎました。そして、ようやく「大島本」の本文に対する疑問が、研究者によって議論されるようになりました。また、〈別本〉と言われるものの存在にも、目が向けられるようになってきたのです。この長い年月の本文研究の停滞を思うと、『源氏物語』の千年紀を契機としてその本文のことが話題になっただけで、これは一大進歩です。ここまで辿り着くのに、とにかく20数年を要したのです。資料が一つや二つ増えたからといって、軽々にその意義と見通しを口にするのは早過ぎます。あまりにも手元に情報がすくな過ぎ

るからです。

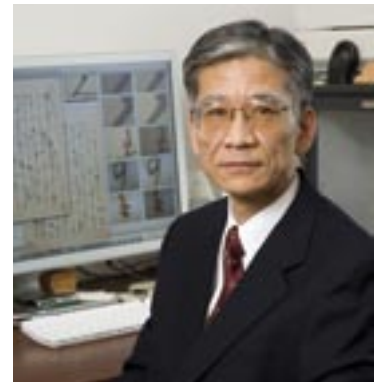
私は、『源氏物語別本集成』を作成している側にいるので、本文に関するデータは幾分多く持っている方だと思います。それでも、わからないことだらけです。なぜこんなに違う文章が伝流しているのか。いつも疑問を抱えながら、『源氏物語』諸本の本文に向き合っています。

次世代への期待

2008年は、『源氏物語』の千年紀という熱気の中で、さまざまなイベントが行われました。その中で、古写本の存在も大きくクローズアップされました。これまでは、『源氏物語』の本文というものはあまり見向きもされず、ひたすら活字による校訂本文で『源氏物語』は読まれていました。しかし、古写本に記されている本文の確認が70年以上も停滞した

ままであることが、ようやく話題として取り上げられる時代が来たのです。私にとっては、夢のような環境に身を置くこととなりました。今から30年前、『源氏物語』の本文の整理に着手したころには、本文に関する討論ができる日が来るのをひたすら待ち望んでいたものでした。それを思うと、「意外に早く来た」という印象を持っています。

予想外に早く『源氏物語』の本文に感心が集まるようになったのですから、後は若手がこうした問題に興味を持ち、育ってくれることを熱望しています。そのためにも、現在作成中の『源氏物語』の本文に関するデータベースを、一人でも多くの方々の協力を得て増補・改訂し、利用してもらえるように、日夜、研究環境の整備に取り組んでいるところです。



伊藤鉄也（いとう・てつや）
高校生の時に谷崎潤一郎の源氏訳を読んだから、源氏物語との付き合いが始まった。23年前に、コンピューターを活用した文学研究の入門書を書いて以来、源氏物語の写本とパソコンが研究に欠かせないものとなった。研究のかたわら、この数年は「賀茂街道から2」というブログで、源氏情報を発信するのが日課となっている。

むしめがねが必需品

大内英範

人間文化研究機構 国文学研究資料館機関研究員

昨年（2008年）は“源氏物語千年紀”として、さまざまな盛り上がりが見られました。中でも私にとって、写本の発見・確認についてのニュースは、どれも興味深いものばかりでした。「角屋本」(末摘花)の発見、長らく行方のわからなかった「大沢本」の出現、空蟬の一卷のみと思われていた「飯島本」(54)巻の確認など……。古い写本の存在が明らかになるたびに、そこにはどのような本文が書かれているのだろうかワクワクしてきます。

源氏物語に限ったことではありませんが、本文研究はまず写本の調査からはじまります。貴重な古写本の調査ですから、メジャーは金属製でないもの、メモは鉛筆を用いるなど、道具にも一定の注意が必要です。そのほかに必需品として、むしめがね(ルーペ)を忘れてはいけません。

たいていの写本で、文字が削られて消され、場合によってはほかの文字が上書きされている箇所が見られます。単純な書き間違いの訂正、他本との校合など、理由はいくつも考えられます。重要なことは、消された文字こそがその写本に記された第一段階の文字だということです。書写者によって最初に書かれた文字を読み取ることが、書本(親本)の本文を推定する重要な手がかりになるのです。

たとえば東洋大学附属図書館所蔵の「高木本」(伝阿仏尼筆)帯木



大内英範（おうち・ひでのり）

巻)も、削除痕の多くみられる写本でした。むしめがねを使って凝視していると……。削られた文字がだんだん見えてきました。それらをすべて記録して持ち帰り、他本の本文とつきあわせてみると、天理図書館所蔵の「池田本」の本文とほぼ一致することがわかったのです。すなわち「高木本」の親本の本文は、「池田本」の本文とほぼ同じ本文だったということになります。こうしたことから、「池田本」と「高木本」は、かなり近い世代で祖本を同じくする写本である蓋然性が極めて高いと認められます。同時に、両本の書写態度の信頼性をも証明するものです。むしめがねの威力で、思いがけない研究成果を得ることができました。

さあ、次はどんな写本と出会うことができるでしょうか。もちろん、むしめがねは忘れません。